

<第13分科会> 連携・接続

研究課題 家庭・地域等との連携と異校種間の接続の推進

分科会の趣旨

近年の度重なる青少年の犯罪、いじめや不登校等、子どもたちをめぐる様々な問題が発生している背景として、家庭の教育力の低下とともに地域におけるつながりの希薄化等が指摘されている。その結果、学校生活においても、子どもたちの基本的な生活習慣の欠如、規範意識やコミュニケーション能力の低下等が課題となっている。心身の調和のとれた健全な子どもを育むためには、学校のみならず、家庭や地域の教育力の向上とともに、学校・家庭・地域の連携を推進することが重要である。

学校には、地域からの協力と地域への貢献という双方向の関わりの中で、地域と一体となって子どもを育む姿勢と実践が求められている。

また、地域の保育所・幼稚園及び小学校・中学校の教職員が、保・幼・小・中間の「段差」や子どもたちの連続的な発達を意識して、相互理解を図ることが大切である。

本分科会では、子ども一人一人の将来を見据え、家庭・地域等との連携や異校種間の円滑な接続を推進するための具体的方策を明らかにする。

研究の視点

(1) 家庭・地域等と連携した開かれた学校づくりの推進

変化の激しい社会の中で、「生きる力」を育む教育の推進は、学校教育の根幹をなすものであり、家庭・地域等と連携した学校づくりが求められてきた。

そのため、これまでも学校では連携の基盤となる開かれた学校づくりを推進してきたが、連携の内容は、地域からの参加であったり、地域への協力であったり、単発的、一方向的な連携にとどまる傾向があった。今後、学校は、地域からの理解や協力、支援を得るだけでなく、地域に貢献する学校として、継続的、双方向的な連携を推進するとともに、それぞれの教育機能が確実に発揮できるよう、その中心的な役割を果たすことが期待されている。

このような視点に立ち、家庭や地域等との相互理解を深め、開かれた学校づくりを推進する上での、校長の果たすべき役割と指導性を究明する。

(2) 異校種間の学びの連続性を重視した取組の推進

学校は、人間性豊かで未来に夢をもつ子どもたちの育成を目指し、将来を見据えた長期的な教育活動を推進しなければならない。

現在、課題となっている、いわゆる「小1プロブレム」や「中1ギャップ」の解消には、異校種間の連携が不可欠である。同じ中学校区の保・幼・小・中の教職員の相互交流や情報交換を通して、課題を共有し、互いの指導技術を高めるなど、異校種間の「段差」を緩和し、円滑な接続を推進することが求められている。

校長は、各接続期における様々な課題解決に向けて、小学校6年間での子どもたちの発達・成長と指導の在り方について、自校内の組織的、継続的な見直しに留まらず、関係校等を交えた学びの連続性を重視した取組を推進する必要がある。

このような視点に立ち、円滑な接続に向けた異校種間の学びの連続性を重視した取組を推進する上での、校長の果たすべき役割と指導性を究明する。